

クリュッグという悦楽



代々、陶芸家の家系である辻家にあつて、父・厚成氏は東京に窯を持つ「東京陶芸家」として

伝統にとらわれない作品を次々と生み出し、

息子・厚志氏も同じ陶芸を生業としながら、車やジュエリーのデザインなど

ジャンルにとらわれない造形の世界を展開する。

この父子が、このほか愛するシャンパーニュがある。

1843年の創業以来、6代にわたって変わらぬ味を継承してきた「クリュッグ」である。



辻 厚志氏(つじ・こうじ)

1976年生まれ。父・厚成氏の影響で、2歳の時から土に親しむ。従来の陶芸の古風なイメージを変え、アクリルなどの素材を取り入れた、都会的、宇宙的なイメージの作品を作り続ける。2001年、アミーコデルイタリア賞受賞。同年、ブルガリ美術館で日本人初の作品永久所蔵となる。車やジュエリーのアートデザインなど、様々なジャンルの造形にも取り組む。

辻 厚成氏(つじ・こうせい)

1942年東京生まれ。和光学園、玉川学園を経て、メキシコ国立大学サンカルロスにて学ぶ。52年、9歳で光風会に特別出品し、55年、12歳で中央公論社画廊にて初の個展を開く。以後、数多くの個展を開催。「東京陶芸家」として、厚成紅、厚成白、世界初の貴金属粘土を使った作品など、伝統にとらわれない新しい陶芸の世界を切り拓いている。

「クリュッグ」という名前を聞いただけで、父・厚成氏はうれしそうに目を細める。辻氏といえは、「厚成紅」と言われる独特の紅い作品が名高いが、「紅い器を並べた食卓のアクセントに黄金のクリュッグ。素晴らしい組み合わせですね」

クリュッグの黄金色はまた、自らと同じ道を歩む新進の陶芸家である息子・厚志氏との大切な思い出を想起させるのだという。

「僕が高校生の頃、父の誕生日にお祝いとしてプレゼントしたのが、クリュッグだったんです」と、厚志氏。父の誕生日に何を贈ろうかと迷ったときに、かつてワインシ

ョップで「クリュッグはシャンパーニュの王様です」と褒められていたことを思い出し、「父には最高のシャンパーニュを贈ろう!」と、レストランでクリュッグを注文したという。

高校生の厚志氏にとってクリュッグはとても手が出る金額ではなかったが、感謝の気持ちを伝えたくて、昼食を抜いてまでお金を貯めたのだという。

「厚志には、何より人への感謝を大切にしてほしいと考えてきました。だからこそ、喜びもひとしおでしたな」と厚成氏は今でも嬉しそうにその時のことを思い出す。

クリュッグはその思い出とともに、辻家のシャンパーニュ・リストの中で揺るぎない最高の地位を維持し続けているという。厚成氏が人を招くとき、宴の最後をシャンパ

ーニュで飾る場合は、クリュッグである。また、厚成氏も大切な人との記念日には必ずクリュッグを傍らに置くという。そんな折々、ふと感じるのがワインづくりと陶芸との共通点だと厚成氏は語る。

「陶芸家にとって、大切なのは土。土を育むのは、その土地の気候風土。その異なる性格を見分け、最も土に合ったフォルム、うわぐすり、焼く温度などを決める。素晴らしい陶器は、自然の恵みであるのと同時に、土が発する言葉を引き分け、最大限にそのポテンシャルを引き出す陶芸家の感性によるものなのです」

同様に最高のワインは、最高の畑から収穫する最高のブドウと、つく

り手の磨かれた技がもたらすものだと二人は口を揃える。

「僕たちが聞き人々に伝えるのは、いわば『粘土語』とでもいうもの。ワインづくりも、ブドウ語を聞き分けるのが大切なのではないのでしょうか」と厚成氏は語る。

「時代を超えてクリュッグがクリュッグであり続けられるのは、ブドウの言葉を聞き分け、シャンパーニュという形に表現する力の継承にあるのではないのでしょうか。いいワインからは、ブドウの声がかつかりと聞こえる。クリュッグの声は力強く、私たちの五感に語りかけてくるのです」

厚成氏は、物心ついた頃から教えたわけでもないのに粘土に興味を示したという。おもちゃの代



Krug Grande Cuvée

伝統的・職人芸のシャンパーニュづくりを徹底的に守り抜いてつくられるグランド・キュヴェ。まさに別格の一本。

標準希望小売価格は17,325円(税込み)。
問い合わせは
シャンパーニュ クリュッグ(電話 03-3478-5784)

お酒は20歳になってから。